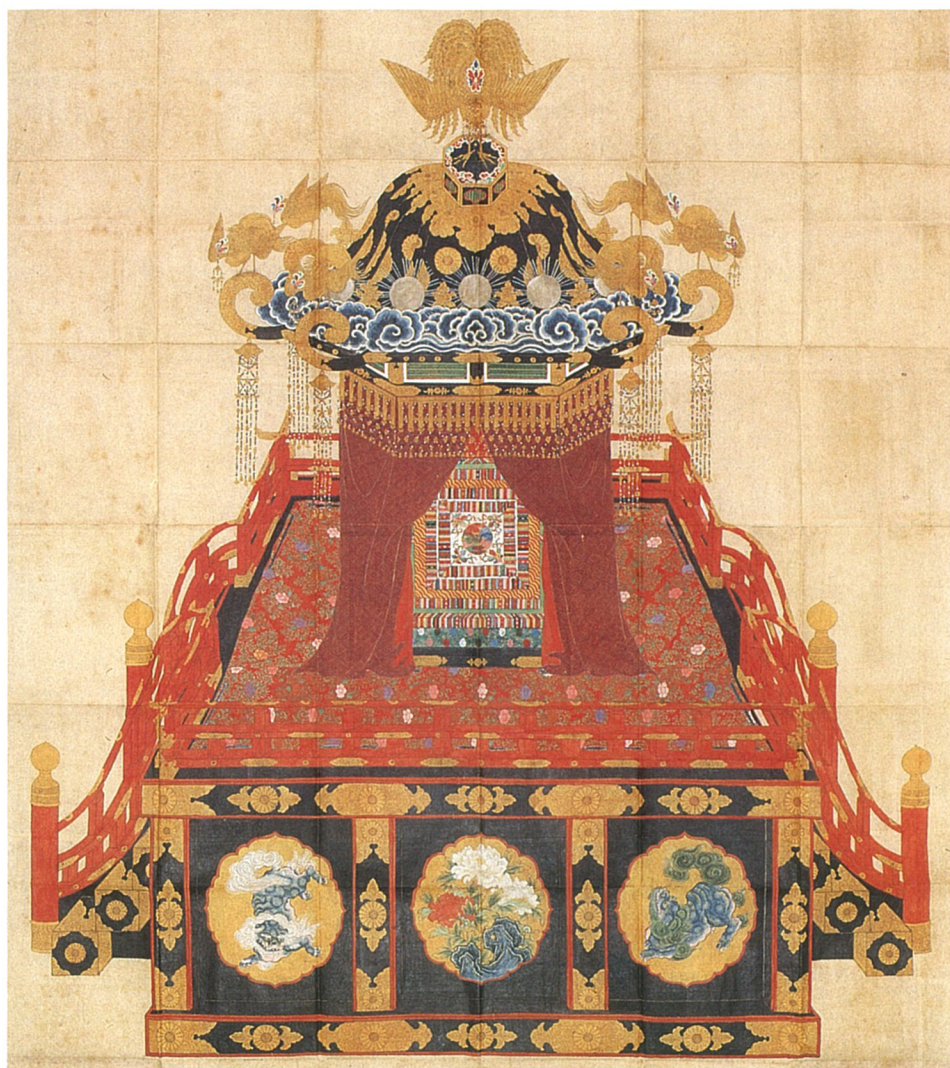


蓬左

HÔSA No.43

名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hôsabunko

1990. 9



たかみくら
高座之図 今村甫紹 天明4年(1784)7月写 274.0×181.6cm

高座（高御座・たかみくら）は、天皇の即位など、朝廷の重要な儀式の際の天皇の御座。
この図は、水戸家が所蔵していた図を写したもの。画工今村甫紹（随学・～1793）は、江戸の
狩野幸信の門人で、明和4年（1767）から尾張藩御用絵師を勤めた。

～八代宗勝から十一代斉温まで～

尾張藩八代藩主宗勝^{むねかつ}（治世1739～61）九代宗睦^{むねちか}（同1761～99）十代斉朝^{なりとも}（同1800～27）十一代斉温^{なりはる}（同1827～39）、一世紀にわたる彼らの治世は、江戸幕府 260年の半ば、折り返し地点からの一世紀でもあります。当文庫の前身である尾張藩の御文庫の蔵書の収集を紹介してきた「徳川義直の蔵書と著述」（S60）「尾張藩主の蔵書～二代光友から四代吉通まで～」（S61）について、今回は、この時代の蔵書を御紹介します。

この時期の御文庫は、すでに基本となる書物は整い、充実期に入っていました。このため、初期のような積極的な大量の収集ではなく、藩撰の編纂物の納本、善本、珍本の新写、藩士の蔵書の献納、藩蔵の貴重書の新写などによる収集が中心となっています。

八代將軍吉宗（1684～1751）の享保の改革に逆行する政策をとって隠居を命ぜられた七代宗春（1696～1764）に代わって藩主となった宗勝（1705～61）は、藩財政の再建のため緊縮政策を第一に宗春の放漫政治一新に努めました。一方、このころには、尾張藩にも全国的に知られた学者が多数輩出し、尾張独自の学問が生まれつつありました。宗勝の政策も倏約一辺倒ではなく、後に藩校の前身となった蟹養斎（朱子学者1704～1778）の学問所を藩士教育の場として補助したり、蔵書家としても知られた神道家吉見幸和（1673～1761）の邸内に藩費をもって書庫をたてるなど文教政策にも力を入れています。とくに、宗勝の時代は、藩政の基本となる文献の編纂が相ついで行われ、藩の蔵書となりました。最初の藩撰地誌「張州府志」、御目見得以上の藩士の系譜集「士林派澗」、幕府に提出した産物調査「御領分中産物下帳」などです。これらの編纂を主導した当時の学会の中心人物松平君山（1697～1783）は、書物奉行をも35年間にわたって勤めており、このほかにも「朝林」（幕府の記録）「諸家系図」（御三家を含む諸大名の系譜集）「年中行事故実考」など、彼が中心となって編集し、御文庫に納められた書物がいくつかあります。

尾張藩中興の英主と評された九代宗睦（1733～99）は、宗勝の政策を継承発展させ、藩政改革を成功に導きました。改革の柱の一つである藩士教育と民衆教化のため天明3年（1783）、藩校明倫堂を創設、さらに中国ではすでに失われていた帝王学のテキスト「群書治要」を明倫堂版として刊行するなど、学術文化の振興に強い関心を持っていました。

一方、当時の尾張は、吉見家（幸和・幸混）、河村家（秀頼・秀根）、神村家（正隣・忠貞）、稲葉通邦等を中心に、神道、有職故実、律令研究などにおいて実証的な古典研究が盛んでした。御文庫では、御書物奉行となった河村秀頼（1718～83）が天明2年、初の分類目録を編纂し、蔵書も、宗睦の命による河村秀根、稲葉通邦（1744～1801）校合の初代藩主義直編「神祇宝典」「類聚日本紀」、同じく通邦校合の大須真福寺本「古事記」、新写本では、義直蔵本の欠本部分を吉見・河村両家の蔵書から写した「類聚国史」、真福寺本を写した「類聚神祇本源」「麗気記」、秀頼が献納した真福寺本「将門記」や神村忠貞の見聞録「御即位次第略解」の写本など、古典研究の隆盛と宗睦の学術文化に対する関心の深さが反映されています。（真福寺は宝生院ともいい中世以来優れた書物の所蔵で知られる。）

また、この時代には、書物に限らず絵画や絵図についても大名家や寺社の所蔵品から写をつくらせた例が数多く見られます。さらに、天明元年（1781）には、後嗣が絶えた神村家の蔵書約 700件余が、寛政元年（1789）には、著者内藤東甫（1727～88）の急死により、二千数件の自筆の画を含む未完の尾張の地誌「張州雜志」100冊が、御文庫の蔵書となっています。

一方、宗勝、宗睦の時代には、その子弟も多く、彼らの蔵書も御文庫の一部を占めています。宗勝の男子で宗睦の弟にあたる勝長は、とくに和歌を好み、和歌関係の蔵書が多いのに加え、その側近達とともに詠んだ歌集などが残されています。また、分家高須藩主から宗睦の養子となりながら、養父に先立つこととなった治行の蔵書では、当時藩学の主流となった山崎闇斎学派の朱子学の書物が多くを占めています。

宗睦の男子、養子が相ついで亡くなり、十代斉朝（1793～1850）は、一橋家から、十一代斉温（1819～39）は將軍家斉の十九男から尾張藩主となりました。彼らもまた、緊縮政策をとりましたが、すでに藩財政の再建は期待できませんでした。文化8年（1825）、冢田大峰（1745～1832）が明倫堂の督学（学長）となると、朱熹の学説を重視する朱子学が退けられて古学が中心となり、御文庫の蔵書にも冢田大峰の註による漢学のテキストが数多く加えられました。さらに、この時期には、家康旧蔵の金沢文庫本や義直の蔵書などの新しい写が作成されており、貴重書の保存を目的としたものかと考えられます。

天保10年（1841）、十一代斉温は、一度も名古屋の地を踏むことなく江戸で没しましたが、学問への関心は強く、尾張の学芸の再興を期待して、同3年宗睦の死によって中絶していた「張州府志」の補訂事業を再開、斉温の死後「尾張志」として完成、御文庫の蔵書となっています。

御文庫における蔵書の収集は、広範囲にわたる大量の蔵書を積極的に収集した初代義直、二代光友の時代にはじまり、基本文献の充実とともに藩主を中心とした収集者の個性や志向が反映されるようになりました。そして、宗勝から斉温にいたるこの時期は、尾張藩内の学術文化の発展を背景に、藩の政策と学術文化の動向が御文庫の蔵書に強く反映されるようになった点にその特徴を見ることができます。

「尾張藩主の蔵書 2 ～八代宗勝から十一代齊温まで～」 出品目録

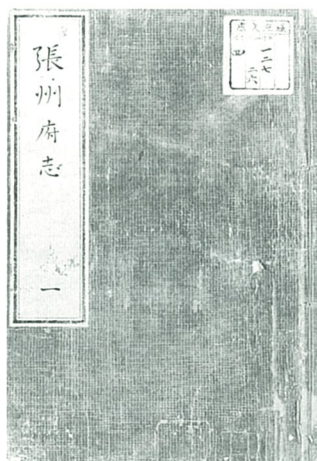
—宗勝—

1. 諸家系図 16冊
松平君山編
元文5年頃写
2. 朝林 131冊
堀貞高・松平君山編
延享3年写・文化13年9月補写
3. 聖濟総録 付存疑 208冊
徹宗救編 元・太医院重修
(存疑・山崎克明撰)
寛政10年写
4. 明史 112冊
張廷玉等撰
清代刊

- 河村秀穎
江戸中期写
8. 天明老々記付録 1冊
河村秀穎
江戸中期写
9. 御即位次第略解 2巻図1巻3冊
神村忠貞著・河村秀俊補
江戸中期写
10. 将門記(大須真福寺本) 1冊
江戸中期写
11. 類聚神祇本源(大須真福寺本) 15巻15冊
度会家行
江戸中期写
12. 類聚国史 69巻66冊
菅原道真
江戸初期写・享和2年補写
13. 類聚日本紀 174巻70冊
徳川義直編 稲葉通邦校
寛政年間稲葉通邦筆
14. 古事記(大須真福寺本) 3巻3冊

—宗睦—

5. 清須翁物語 1冊
江戸中期写
6. 関ヶ原御陣場之図 1枚
寛政7年写
7. 天明老々記 1冊



寶曆龍集壬申孟春
臣松平秀雲謹撰

衆說若事蹟不詳者則
雲等跋涉山川親詢土俗
繩謬紀實必歸至當而後
已數載之功總計三十卷
茲納東觀於此編一成
獻之不朽可備善哉
傳之家大典亦善哉
國之一大不備亦善哉
等不勝感激書其事弁
諸卷端以據喜懼之萬一
云爾



張州府志 松平君山等編 寶曆2年 31巻26冊

藩撰地誌の第1号。三代藩主綱誠の命で計画され、綱誠の死によって中断し未完となっていた「尾張風土記」の遺志をついで、七代宗睦の命により、宝曆2年(1752)に完成した。

総裁千村伯斎(～1754)、編集松平君山。実地調査に重点をおいた内容は正確で、後世の規範となった。ただし、記述が漢文であったことから、九代宗睦は、稲葉通邦にその補訂と和文改訂を命じた。この「張州府志」補訂事業は、十一代齊温によって本格的に着手され、弘化2年(1845)、「尾張志」として完成したが、その内容は「張州府志」の和文改訂にすぎないとされる。

太安万呂 稲葉通邦校 寛政年間稲葉通邦筆		山中長俊 江戸中期写	
15. 古事記述言・序	2冊	34. 安永四未・五申歳和歌集	2冊
稲葉通邦・岡田挺之 寛政9年写		江戸中期写	
16. 群書治要	16巻6冊	35. 和歌張玉集	2巻2冊
魏徵等撰 江戸中期宗睦写		後藤庸編 江戸中期写	
17. 同	47冊	—治休—	
同 天明7年明倫堂刊		36. 御遺戒	1冊
18. 心得の箇条		徳川義直 徳川治休筆写	
徳川宗睦 寛政元年自筆		37. 武門要鑑抄	7冊
19. 御軍用御書付	3巻21折	江戸後期写	
寛政6年写		38. 日置流四巻	2冊
20. 平重盛公御鎧	8枚	江戸後期写	
寛政3年写		39. 史記評林	131巻25冊
21. 大内義隆鎧図	13枚	凌稚隆編 李光縉増補 延宝2年刊	
寛政3年写		—治行—	
22. 高座之図	1枚	40. 玉山講義	4巻3冊
天明4年今村甫紹写		刊(寛文12年跋)	
23. 顔子関子像	2枚2通	41. 朱子語類	46冊
狩野養川 寛政3年画		寛文8年刊	
24. 薩州府下聖堂之図・薩州府下演武場之図	2枚	42. 小学	2冊
江戸後期写		山崎嘉点 延宝4年刊	
—斉朝—		43. 近思録	2冊
25. 一軌図並並資講	9冊	江戸中期刊	
中村蕃政 文政9年写		44. 孝経刊誤	1冊
26. 四書	凡26巻10冊	朱熹 明暦2年刊	
朱熹章句集注 寛政7年刊		45. 論孟精義	14巻14冊
27. 手配之事	1通	朱熹 享保14年刊	
徳川斉朝 文化9年3月自筆		46. 禁中并公家諸法度・書札之書物	16冊
—斉温—		江戸後期写	
28. 武徳大成記	31巻31冊	—その他—	
林信篤等 江戸末期刊		47. 張州府志	31巻26冊
29. 二十二史反爾録	3巻3冊	松平君山等編 宝暦2年写	
彭希涑編 黄泉道人補訂 天保6年刊		48. 張州雜志	100巻100冊
30. 四書白文	6巻4冊	内藤東甫編 江戸中期刊	
寛政11年刊		49. 尾張志	61巻61冊14枚
31. 五経白文	11巻11冊	深田正韶等編 天保15年写	
寛政12年刊		50. 士林浜潤	125冊
—勝長—		松平君山編 天保2年	
32. 御年譜付尾	13冊		
江戸中期写			
33. 中古日本治乱記	92巻92冊		

蓬左アルバム

11. 思い出のアルバム —昭和30年～40年ごろ—



S29. 2.28～3.7 「書籍の歴史展」於 徳川美術館 (写真提供・杉山正義氏)



S30. 3.31 蓬左文庫門前 (現在の東図書館門前) で阿部秋生氏 (当時東大助教授) 撮影



旧 蓬左文庫 (S36年)



旧 蓬左文庫事務室 (S30年代末)

整理休館のお知らせ

蓬左文庫では、年末年始の休館に先立ち蔵書点検のため下記のように休館させていただきます。

利用者の皆様には、御迷惑をおかけすることとなりますが、当文庫蔵書の末長い保存と活用のため、皆様の御理解御協力を賜りますようお願い申し上げます。

記

期間 平成2年12月20日(木)～27日(木)

(なお、年末年始の休館は12月28日(金)～1月4日(金)です。)

利用ご案内

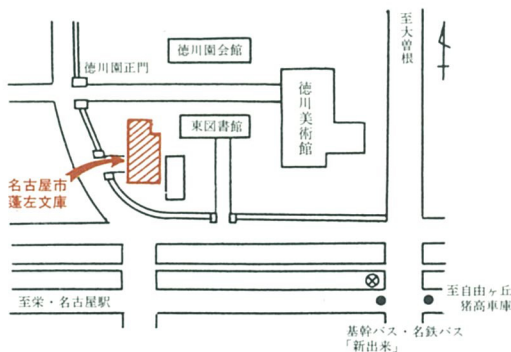
- ▷開館時間 午前9時30分～午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)
- 祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
月曜 " 月・火休館
- 特別整理期間
年末年始(12月28日～1月4日)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません。
- ▷展示 随時蔵書の一部を展示
(特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 保存上影響のないものについて複写サービス(マイクロフィルム利用他)を行います。ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935-2173

〈名古屋駅から〉市バス(基2)「自由ヶ丘」「猪高車庫」行
名鉄バス「本地ヶ原方面」行
〈栄から〉市バス(基2)「引山」「自由ヶ丘」
「猪高車庫」行
「新出来」下車、徒歩4分



「蓬左」第43号 ☆平成2年9月29日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)

☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)